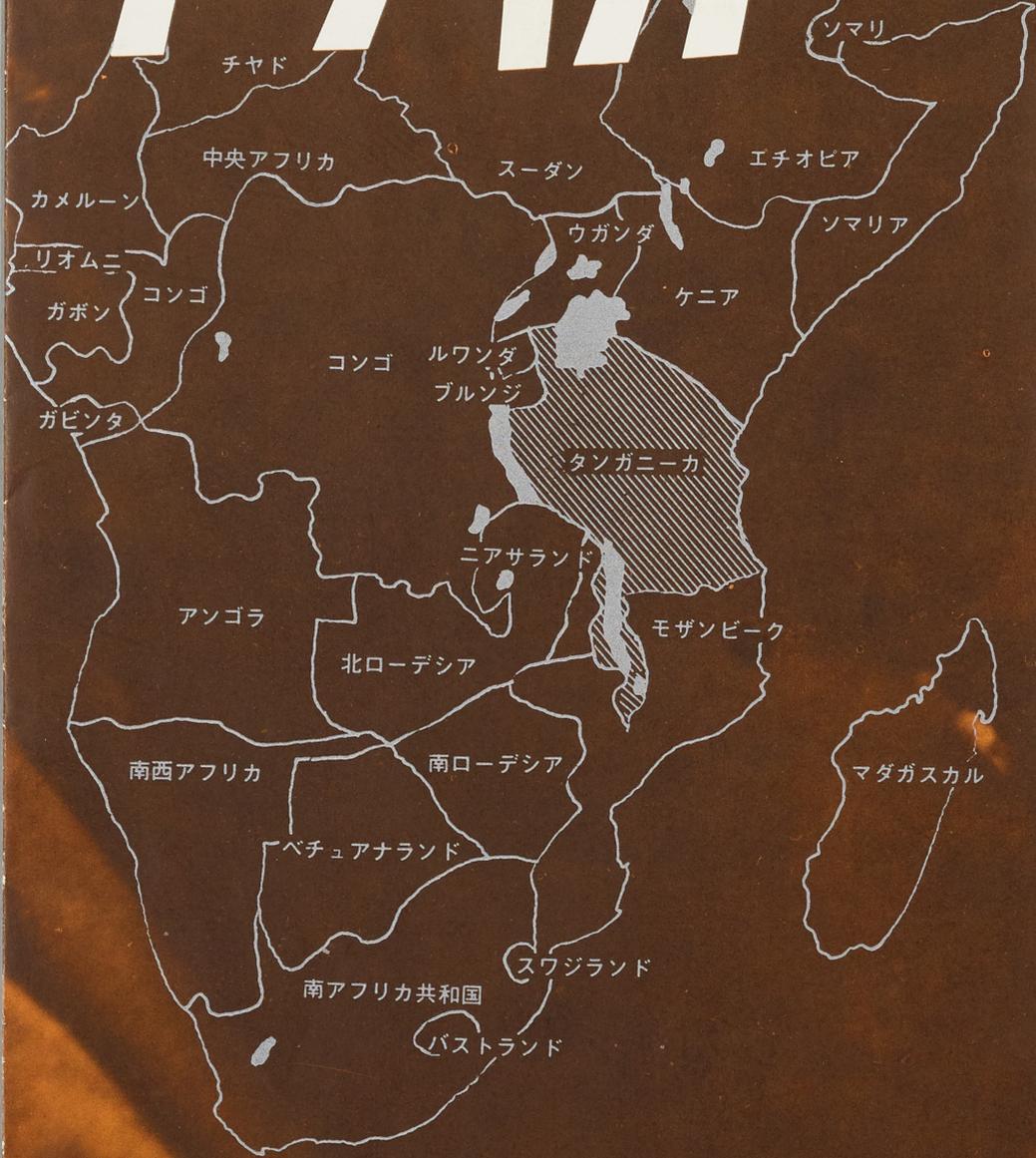


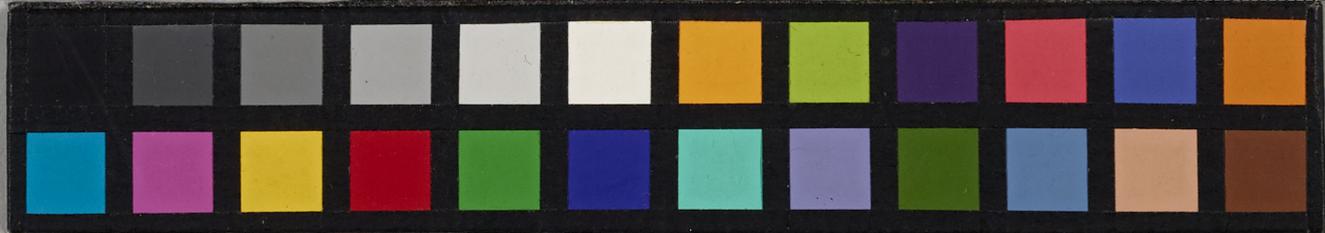
京都大学アフリカ研究会構成

ジャボ アフリカ



Kyoto University

4月9日放送開始
NHKテレビ(日)9-9:30AM TBSテレビ(日)9-9:30AM RKB毎日テレビ(日)3-3:30PM
テレビ(土)3:30-4:00PM(日)8-8:30AM HBCテレビ(土)4-4:30PM(日)8-8:30AM





新テレビ番組「ジャンボ・アフリカ」について

「ジャンボ・アフリカ」、「今日は アフリカ」——この言葉そのものが、この番組のテーマということが出来ます。人に会えば、ジャンボ！ と行って握手をする。そして、人の喜びを自分の喜びとし、相手の痛みを自分の痛みとして感ずる、いわば、人類全体の連帯感を謳いあげようとしているのです。

京都大学アフリカ学術調査隊は、今西錦司博士を頂点とする霊長類研究グループが、中核をなしており、人類誕生の歴史を探るために、アフリカの奥深く足を踏み入れて以来、すでに7年が経過しています。更に、東アフリカ、タンガニカの秘境に2つの基地（エヤシ基地、カボゴ基地）を設営し、4名の隊員が、現住民の1員として住み込んでから2年の月日が流れています。

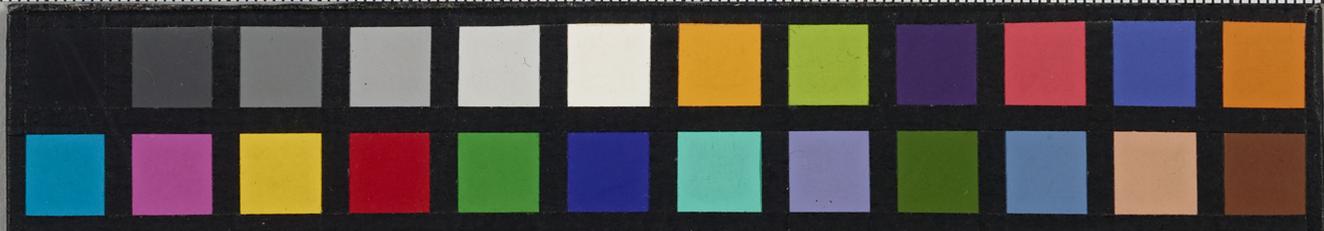
「住み込み調査」は、隊員一人一人の大胆さ、勇気、忍耐強さによって支えられるものですが、そのかわり沢山の副産物を得ることが出来ます。その最も大きなものは、現地の人たちの心を掴むことができる、ということでしょう。

この番組は隊員と現地の人たちとの間に生まれた友愛そのものを描き、更に、一見野バンに見える人々の生活の中に、人間の心の故郷のような素朴さが光っているのを発見しているのです。

また、若い人たちに、人間には、やらねばならないことが、まだまだ沢山ある、たゞそのためには、大きな努力が必要なのだ——と訴えています。

このフィルムは、よく見受ける、海外駆けあるきの紹介番組ではありません。一か所にながく定着して、朝から晩まで、毎日カメラを廻しつづけた結果、得ることが出来た貴重なヒューマンドキュメントです。撮影には、9ヶ月を要しました。

Kyoto University



こんにちわ・アフリカ

ジャボ アフリカ

●各回のあらまし

1 チャムチャムの家のドクター

京都大学アフリカ学術調査隊がアフリカ大陸に足を踏み入れてから、すでに7年たっている。この調査隊は人類誕生の謎をめぐって、サバンナを中心に現存する類人猿の社会を明らかにすることと、もうひとつはいまなお原始的な狩猟採集生活を営む原住民の社会生活を調べることによって、何十万年かの昔に人類の祖先がたどった経路を再現しようと試みるものである。エヤシ基地における富川・富田両隊員の現地人に対するアプローチぶりを紹介する。

2 アフリカの心

第一部の続編。学術調査隊員と現地人との心のふれあいを描く。1963年7月、日本から今西錦司教授を中心に11人の新しい隊員が、エヤシ基地に到着した。この隊には学術資料映画を撮影する計画がある。民族独立の波に乗って変貌するアフリカを、現在の時点において撮影しておくことは、歴史資料としての価値を考えると、当然のことである。こんな任務を持って到着した隊員に現地の人々は、歓迎のゴマ（酒宴）を開いてくれた。

3 アフリカの自然動物園

世界でいちばんぜいたくなサファリ（旅）はなんといっても、自然の中を悠々と歩きまわる野獣を数メートル先に見るアフリカの自然動物園めぐりであろう。かつてはライフルを持っての狩猟旅行が、いまではカメラを持っての観光旅行にかわってきた。それはすなわち、アフリカの変貌の一端である。この一編はカメラ班の単独旅行によるナイロビ・アンボセリ・レークマニヤラ・ゴロンゴロの自然動物園めぐりである。

4 ギニヤメダとピキピキおじさん（仮題）

ギニヤメダは12才になるマンガッティ族の少年で、富川隊員の養子となっている。彼はマンゴラ村の小学校へ通っている。ある日大きな爆音をたてて和崎隊員がピキピキ（オートバイ）で基地へやってきた。ギニヤメダの小学校で先生の補佐をするためだ。ギニヤメダは一度ピキピキに乗ってみたいが許してもらえない。しかしある日おじさんのうしろに乗せてもらってマンゴラのサバンナの中を走りまわることができた…。

Kyoto University

5 草原の獵人 ティンディガ

世界で、最もおくれた原始生活を送る狩猟民、東アフリカきっての強弓使い、そして、陽気な獵人、ティンディガ族。しかし、彼らは衰微の一途をたどっている。そのうえ、ほかの部族、遊牧民、農耕民などに入りこまれ、獵場がせばまり、わずかに生きのこったものたちは、いま農耕の生活にきりかえようとしている。そのティンディガ族と富田隊員との不思議な友情を描く。

6 マンゴラの黄色い土

マンゴラと呼ばれる一帯の秘境は、かつては狩猟民ティンディガ族の獵場だった。モロギは、いまにも消え去りそうなティンディガ族の一人だ。彼には、ママと妻と三人の子供がいる。ある時、ママがブワナ・ガンガ（土着の怪しげな医者）のつくった薬をのんで神経マヒをおこして倒れた。富田隊員の応急処置もむなしく枯れるように死んでいった。モロギはママの屍体をマンゴラの土にうめながら自分たちの狩猟生活に疑問をもちはじめた。

7 チンパンジーと男たち

九州本土ぐらいの大きさがあるタンガニカ湖のほとりに京都大学類人猿班のカボゴ基地がある。二年前、全くの無人地帯であったカボゴ岬の近く、ムクユの浜にパイプハウスが建てられ二人の学生と数人の使用人が住みついた。彼らは毎日ムクユの山にわけ入り、チンパンジーを追いかけている。現地人にはなぜチンパンジーを追いかけることが大切なのかかわからない。こうした生活を紹介しながら学問とは？……の疑問を考えてみる。

8 チンパンジーを追って

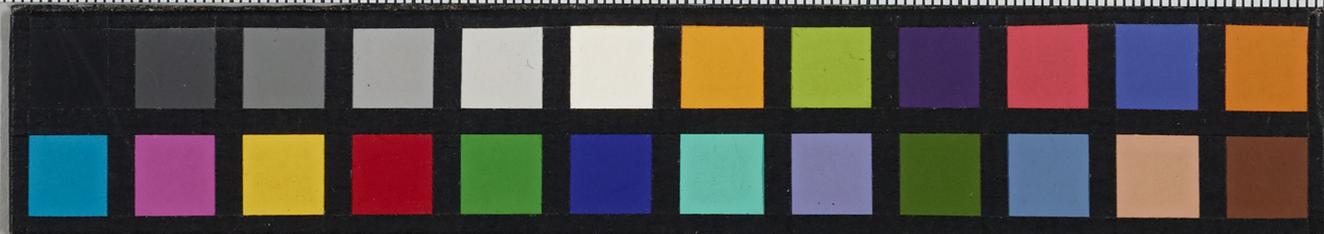
類人猿について長期観察するためにタンガニカ湖畔に、半永久的な基地として設けられたカボゴ基地へ、日本から交代要員として伊谷、伊沢両隊員がやってきた。ニホンザルの研究でその名も高い伊谷隊員は、先天的にサルに好かれるタイプだといわれている。が伊谷隊員もサルに対して深い愛情を持っている。伊谷隊員は、今日もチンパンジーを追って、雨期のオープンフォレストの中へ入って行った。

9 トングエの唄

ある人間の集団が、特定の地理的環境のもとで長い年月社会生活を営んでいると、おのずからそこに共通の理念や独自の文化がはぐくまれてくる。こうしてはぐくまれた文化遺産に対して誰もが限らない愛情を持っている。カボゴ基地のあるタンガニカ湖の東湖畔に半農半漁のトングエ族が点在している。彼らにも先人たちの築きあげた言語・宗教・風俗習慣・伝統がある。舟で旅をしながら彼らのゴマ（踊り）を中心に日常生活を描く。

10 キリマンジャロからきた運転手

大型ウェポンキャリヤ「大和号」の運転手として、終始よく働いてくれた好青年ヴィタリスはチャガ族である。彼らチャガ族はキリマンジャロの中腹を切りひらいた農場をもち、バナナやコーヒーを栽培している。ヴィタリスにもちゃんとした農場があった。しかし彼らは農場を離れて働かねばならない。日本の農村問題とは少し違っているが、彼にも悩みがある。彼の村の生活を描きながら、アフリカの青年たちの生活と意見を紹介する。



風と牛と シャムゲの唄

シャムゲは28才。シャムゲとは「まだ！」という意味だ。彼はマンガッティ族で、草原から草原へと水と草を求めて歩く遊牧民である。シャムゲは今度、お嫁さんをもたらすことになった。そのためにお金があるので、ゴンベ(牛)2頭を、牛市へつれていって売ることにした。彼は2頭のゴンベをひきつれて村人たちと一緒に、牛市のある町まで2日がかりの旅にでた。シャムゲの町での行動を追いながら、森の人間と町の人間の交渉などを描く。

11

シャムゲの結婚式

シャムゲのお嫁さんの名前はヒツコイといい、2人目である。このお嫁さんの値段は牛1頭、現金4千円、ハチミツ1かんだ。シャムゲも自給自足の遊牧民のそれにもれず、あまり金持ではないが、村人たちの手で式は盛大におこなわれた。泣き女たちもやってきた。踊りには富田隊員も参加して、村の人々とともに心からシャムゲの結婚を祝った。遊牧の民、マンガッティ族の結婚式のようすを紹介する。

12

森の裁判

マンガッティ族の長老たちはよく酒宴を持って、村の掟を維持するために討論する。若者たちは力仕事にかりだされることがよくあるが、酒席によばれることはない。富田隊員はそんな若者たちのために、酒宴の席からの盗み酒の指導をした。そのことが後日バテ大騒ぎとなり富川長老が裁判にかけられた。「村の長老たちに酒をひょうたん一本おごること」の判決がおりた。ハチミツで酒を作り…その酒で再び酒もりを開き長老たちの体面はたもったが。

13

モシの街の 子供たち

タンガニカとケニアの国境にそびえるアフリカでいちばん高く、美しい山、キリマンジャロ。そのふもとにモシの街がよこたわっている。アフリカの都会は白人が中心になっている感じだが、モシは全くアフリカンの街だ。そして文明的に大変進んでるといわれるチャガ族が大部分を占めている。街はあかるく、子供たちは元気だ。京大調査隊はある日マジエンゴ中学校を訪問して、大歓迎をうけた。学校制度・部族や言葉の問題などをあわせて紹介する。

14

ナイロビからの メッセージ

新興独立国ケニアの首都ナイロビは白人がひらいた都市だ。マウマウ団で有名なキクユ族がいちばん多い。それだけにややトゲを感じる。谷口隊員はある日、キクユ族のインテリ青年、フレッドとクリストファの友だちになった。彼の家庭をたずねたり、街を歩いているうちに谷口隊員は、独立国とはいえ大きい悩みを内蔵したケニア、いやアフリカに気づいた。フレッドがくれた日本人へのメッセージを中心にアフリカの将来を見つめる。

15

サファリ(旅)

サファリとは旅のことだ。旅には人生がある。アフリカの旅には大きな努力が必要だ。ちょうど生きてゆくのに努力が必要のように……。となりの村までちょっとでかける小さな現地人の旅、自動車で原野をすつとばす大きい旅。また遊牧民のように生活様式そのものが旅であるもの。このようにひとくちに旅といってもいろいろある。いろんな旅を描きながら、アフリカを紹介してゆく。カメラは最後にその美しさをほこるキリマンジャロにのぼって行く。

16

Kyoto University



5



11



6

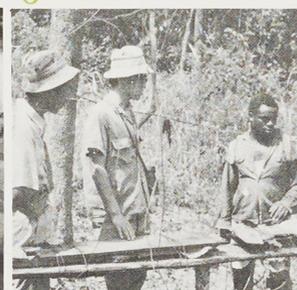


12

番組スチール写真



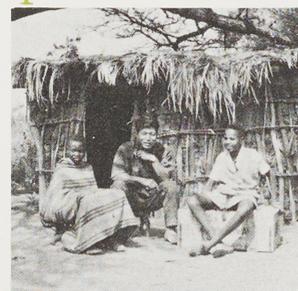
1



7



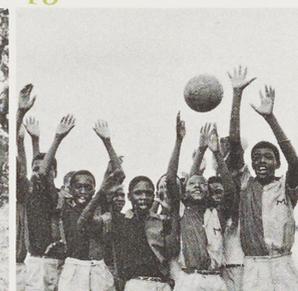
13



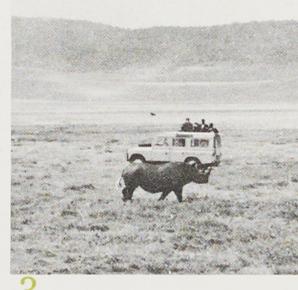
2



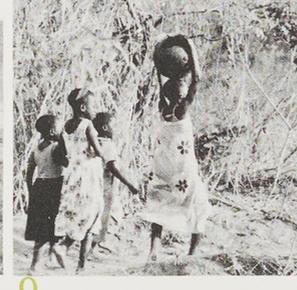
8



14



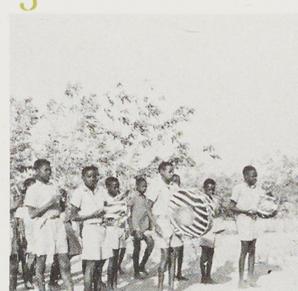
3



9



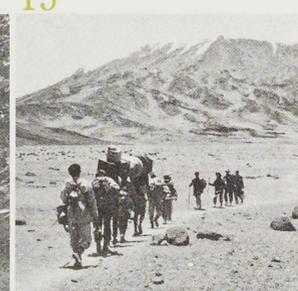
15



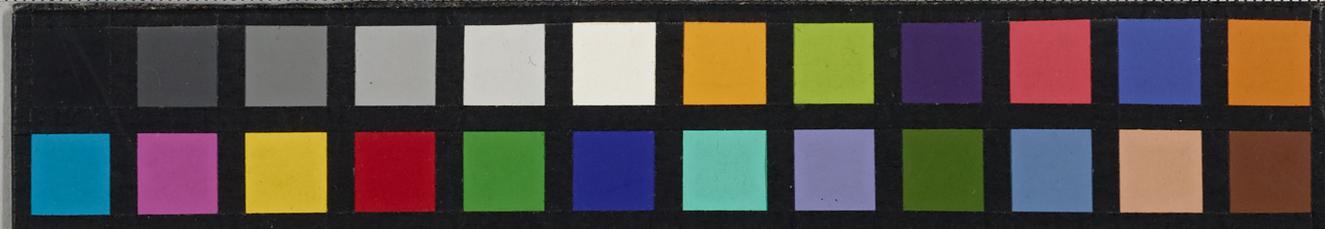
4



10



16



●京都大学アフリカ
学術調査隊について

世界平和に関与すべき
一大新興勢力として
アフリカの発展は
いまや万人の注目を
あつめつつあるが、
いっぽうでは人類誕生
の地としてもまた、ア
フリカは学界における注視の
的となっている。すなわち
1924年、南アフリカにおける
R・ダートのオーストラロピ
テクス、1959年、東アフリカに
おける L.S.B. リーキー のジン
ジャントロープスの発見等は、人
類誕生の場をめぐる、あらたにい
くつかの課題を提出するに至った
のである。

われわれ京都大学アフリカ学術
調査隊は、こうした課題を解くための方
法として、人類誕生の場と考えられる東
アフリカのサバンナ(草原)をえらび、ひとつ
は現存する類人猿の社会生活を明らかに
することによりいまひとつは、いま
なお原始的な狩猟採集生活を営む
原住民の社会生活を調べることに
よって、何十万年かの昔に人類
の祖先がたどった経路を、復元
しようと試みている。類人猿に
ついては、過去10年余にわたる野
生ニホンザルの生態学的社会的
研究の上において、1958年以来、す
でに三回にわたる野生ゴリラの調査を
行ない、1961年からは サバンナのチ
ンパンジーの研究に目標をおいて、その
餌づけによる長期観察のため、タンガニカ
湖畔に半永久的な基地を建設し個体識別にもと
づく本格的観察に移りつつある。

いっぽう1961年度以来、エヤシ湖畔に基地を
設けた人類班は、医療活動を通じて、狩猟採集民
の生活、分布、移動の範囲などについて、すでに
多大の資料を集積することができた。

昨1963年度に増員派遣された調査隊には、映画
班が参加し、独立の波にのって変貌しつつあるア
フリカを、また現住民の一員として住み込み調査を
行なう隊員と、現住民との間に生れた友情そのものを
数万フィートにのぼるフィルムに収めてきた。このフィ
ルムは、学術資料として、また日本とアフリカと結ぶ友愛
のあらわれとして価値の高いものであると信じている。

京都大学教授
今西 錦司



隊長 今西錦司
京大人文学部研究所教授



人類班 梅棹忠夫
大阪市大理学部助教授



類人猿班 伊谷純一郎
京大理学部助教授



診療班 浅井東一
大阪浪速病院院長



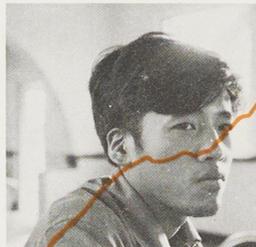
人類班 富田浩造
北大文学部大学院



人類班 富川盛道
北大文学部助手



類人猿班 豊嶋頭達
京大理学部大学院



類人猿班 端信行
京大文学部



類人猿班 東 滋
大阪市大理学部大学院



人類班 谷口 穰
京大文学部



人類班 伊沢絃生
京大理学部大学院



人類班 和崎洋一
京大人文学部研究所



撮影班 村上 進

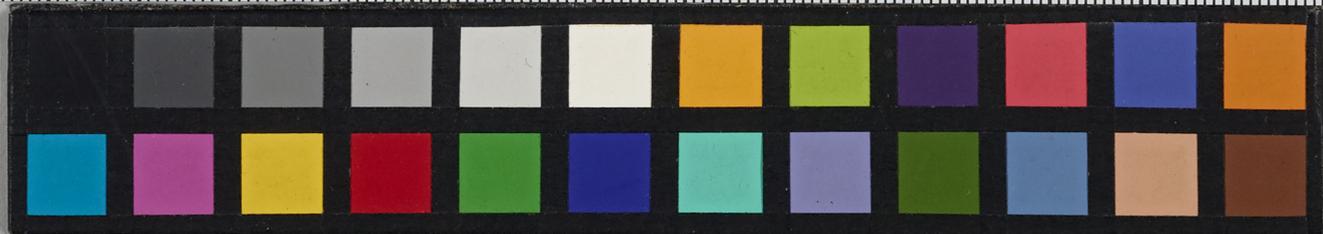


撮影班 小泉隆三



撮影班 河端 繁

Kyoto University



現地で活躍する診療班

タケダの総合ビタミン剤
強力 **パンビタンM**

- お子様に…パンビタンペレー
パンビタンペレーチョコレート



- 赤ちゃんに…パンビタン液

提供



武田薬品工業株式会社

大阪市東区道修町2丁目27

Kyoto University

【お願い】 この番組をごらんになったご意見ご感想をお寄せ下さい

